

No. 5 秦野戸川公園 都市公園整備事業

神奈川県広域緑地計画（平成 8 年 12 月）

広域公園配置の考え方と基本方針のもとに計画した広域公園の 1 つである。

イ）市の計画

秦野市都市マスタープラン（平成 24 年 3 月）

将来都市構造における自然とのふれあい拠点として位置づけられている。

秦野市緑の基本計画（平成 20 年 3 月）

都市公園の整備方針の中で、広域的な拠点として位置づけられている。

2. 事業の経緯や必要性

1) 経緯

昭和 58～59 年度	「大規模公園緑地系統調査」策定
昭和 63 年度	「新規広域公園候補地選定調査」にて候補地の一つに選定
平成 2 年度	「秦野戸川公園(仮称)整備計画調査」において基本設計を実施
平成 4 年度	50.7ha の広域公園として都市計画決定・事業着手
平成 9 年度	一部開設（12.0ha）
平成 10 年度	開設区域の拡大（累計 20.1ha）
平成 13 年度	開設区域の拡大（累計 26.6ha）
平成 14 年度	開設区域の拡大（累計 27.2ha）
平成 17 年度	開設区域の拡大（累計 34.6ha）
平成 20 年度	開設区域の拡大（累計 35.3ha）
平成 22 年度	開設区域の拡大（累計 36.1ha）

2) 必要性

本公園は、丹沢の主要登山基地として賑わい、山麓の田園景観が望める公園として県民ニーズが高く、自然環境を活かした多様なレクリエーション機能を有する広域公園である。多様な機能を有しているため、生物多様性の確保や環境教育の提供などのストック効果も多様であり、平成 32 年度に予定されている新東名及び秦野 SA の供用開始により、観光振興効果やレクリエーション空間提供効果などの更なるストック効果の向上が見込まれる。特に本公園は、地域の資源や文化と一体となった観光資源として、多数の観光客を誘引するポテンシャルを有していることから、当該地域の地方創生に寄与するためにも、残された未整備ゾーンの早期開設を目指し、本事業を継続する必要がある。

3. 事業の目的

- 1) 丹沢山塊の山里的な田園景観や自然環境を保全・活用することで、地域の自然や文化とふれあえ、県民の広域的なレクリエーション活動の場となるような公園を整備する。
- 2) 多様な行催事の実施等により地域コミュニティの活性化に寄与するとともに、秦野市と防災協定を締結しており、災害発生時の拠点等として当該地域の安全性を向上させる効果も有する。

4. 事業内容

- 1) 工 種：都市公園整備
- 2) 事業箇所：秦野市 堀山下・戸川・横野地区
- 3) 計画面積：50.7ha

5. 事業実施にあたり配慮した項目

1) 稀少鳥類への配慮

本公園近傍において希少鳥類の生息が確認されたため、公園を整備するにあたって地元の保護団体から様々な要望が出され、専門的な調整を行う必要性が生じた。円滑な公園整備を進めるため、地元の保護団体に加えて学識経験者を入れた組織を立ち上げ、希少鳥類の保護対策等について検討を行った。その結果として、平成 18 年度には本公園の整備に係るガイドライン、平成 19 年度には維持管理ガイドラインを策定するに至った。



図 3 全体平面図



写真 1 本公園のシンボル「風の吊橋」



写真 2 川遊び場と遊具広場

チェックリスト

No. 5 秦野戸川公園 都市公園整備事業

(1) 事業の必要性等に関する視点

事業を巡る社会経済状況

ア) 地域の状況

本公園の周辺では、平成 32 年度に新東名及び秦野 SA の供用開始が予定されており、秦野市をはじめとする周辺地区における地域振興への期待が高まっている。

これに伴い、秦野市では交通の優位性を活かした周辺の土地利用構想（秦野 SA(仮称)スマート IC を活かした周辺土地利用構想(H26.7)）を策定し、当該地域の持続的な発展と魅力ある都市づくりの実現に向け、秦野 SA 等の周辺の望ましい土地利用の方向性を示している。

イ) 地元の意識など

本公園は、平成 22 年度に第 61 回全国植樹祭の会場に選ばれ、天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、樹木の種をお手播きいただく様子が全国放送されるなど、地元住民はもとより、県内外の注目を集めた。

また、例年、「秦野丹沢まつり」や「秦野戸川公園まつり」、市マラソン大会などの会場として利用されており、地元住民にとって親しみやすい公園となっている。

ウ) 公園利用者数の推移

本公園の利用者数は、年間約 52 万人を想定して計画されているが、開設区域の拡大とともに増加し、平成 19 年度以降は 45 万人前後で推移してきた。その後、平成 25 年度以降に再び増加傾向を示しており、今後の新東名及び秦野 SA の供用開始により、更なる増加が期待される。

表 1 年間利用者数の推移

年度	16	17	18	19	20	21
利用者数（人）	336,140	322,490	358,880	470,440	450,800	454,320
年度	22	23	24	25	26	27
利用者数（人）	434,480	394,170	444,380	510,090	664,530	575,920

事業の投資効果等

■費用対効果

$B/C = \text{総便益} / \text{総費用} = 833.2 \text{ 億円} / 536.0 \text{ 億円} = 1.55$

総便益：833.2 億円 直接利用価値：340.0 億円

間接利用価値：493.2 億円

総費用：536.0 億円 用地費：286.8 億円

施設費：202.8 億円

維持管理費：46.4 億円 （金額は現在価値）

■上記便益に算定されていない効果

ア) 登山・環境保護の拠点

本公園では、登山者の急増に伴いニーズが高まった登山者マナー及び技術向上機会の提供や、登山道清掃など山岳ボランティア活動の拠点機能の提供など、丹沢山系の観光・自然保護の中核的な役割を果たしている。

イ) 環境教育の場

森の観察ゾーンでのバードウォッチングや、里山の環境学習及び稲作体験、水無川での川遊びなど、都市域から気軽に行ける貴重な自然・環境教育の場となっており、環境教育的価値が高い。

ウ) 市民参加型の公園づくり

地元自治会などの参加による地域の風物詩「秦野丹沢まつり」や「秦野戸川公園まつり」、市民参加によるチューリップの植え付けやイングリッシュガーデンの管理など、参加型の公園づくりに取り組んでおり、管理費低減の観点だけでなく、地域住民にとって親しみを感じてもらう取り組みとして効果が高い。

エ) 付加価値の創出

吊り橋やサクラなどのライトアップ、年間を通して花と親しめる植栽、写真展など、定期的にイベントを開催することで公園の付加価値を創出し、一年を通して親しめる公園づくりに取り組んでいる。



写真 3 7万本のチューリップの植え付け



写真 4 秦野丹沢まつり



写真 5 川遊びゾーンで遊ぶ子供たち



写真 6 秦野ビジターセンターの取り組み



写真 7 クライミングウォール
(山岳スポーツセンター)

No. 5 秦野戸川公園 都市公園整備事業

関係する地方公共団体等の意見

■ 秦野市

秦野 SA の北側について、本公園を核として、良好な自然環境を活かした観光・スポーツ・レクリエーション施設や宿泊施設等、さらには訪れる人の消費活動を促す地場産品等の販売施設の立地・集積を図ることとしている。（「秦野 SA(仮称)スマート IC を活かした周辺土地利用構想(H26.7)」より）

（２）事業の進捗の見込みの視点

事業の進捗状況

- 事業化年度：平成 4 年度
- 用地着手年度：平成 4 年度
- 進捗率：98.8%（事業費ベース）
- 供用率：71.2%（開設面積 36.1ha / 計画面積 50.7ha）
- 残事業の内容：用地買収、キャンプゾーン・山の里クラフトゾーンの整備
- 工事着手年度：平成 6 年度
- 用地取得率：96.7%

これまでの課題に対する取り組み状況

希少鳥類への配慮については、本公園の開設済み区域内に代替巣を設置し、未整備箇所（山の里クラフトゾーン）から代替巣への営巣を促すよう対策を講じている。

今後のスケジュール

残された未整備ゾーンについては、平成 32 年度の秦野 SA の供用開始を見据えて、秦野市が検討を進めている秦野 SA 周辺の土地利用構想と連携しながら、観光振興やレクリエーション機能の観点からの検討を行い、更なる利用促進が図れるよう関係機関等との調整及び施設整備を進めていく。また、この検討状況を踏まえ、関係地権者との調整を行うとともに、希少鳥類の代替巣への営巣状況も確認していく。

表 2 今後のスケジュール

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	H31 年度	H32 年度
事業計画の検討・調査					
関係者との調整					
施設整備					

（３）コスト縮減や代替案立案等の可能性の視点

■ 代替案立案等の可能性

本公園は、県内の広域公園の配置バランスを考えて計画(神奈川県広域緑地計画 平成 8 年 12 月)されており、事業も最終段階を迎えている。周辺では、平成 32 年度の供用開始を目指して新東名及び秦野 SA が事業中であり、それに併せて秦野市が周辺地域の土地利用等について計画(秦野 SA(仮称)スマート IC を活かした周辺土地利用構想(H26.7))していることから、近隣に代替地を確保することは困難である。



写真 8 パーベキュー場



写真 9 茶室と庭園の趣



写真 10 パークセンターと秦野ビジターセンター



写真 11 観察窓と里山の自然を解説するサイン



写真 12 少年野球場



写真 13 丹沢山系が遠景に映える園内の紅葉

対応方針案

継続

本公園は、都市域から気軽に行ける貴重な観光レクリエーション・自然体験型の公園であるとともに、丹沢山系の代表的な登山拠点としても、多くの県民に親しまれている。
今後、新東名及び秦野 SA の供用開始により広域的なアクセス機能が拡充されることで、更なる利用者数の増加が見込まれ、地域観光の核としても非常に高いポテンシャルを有していることから、事業を継続する必要があると判断する。